大工これを見て嘆息して云、かく蝙蝠を苦むること、これ乃我罪なり、この蝙蝠の歳月を經ること已に久しきうち、何を食物として活ることを得たるにやと思つゝ、心をつけて見るに、その棲るところの下に糞あり、いと不思議のことといへば、近きあたりの者この事を聞て、觀に來るもの群集せり、その中にある人の云、その蝙蝠は雌か雄かは知らねど、その偶の一つが餌をはこびて扶け養ふこと疑ふべからずといへり、かゝれば人みな其夫婦の情の厚きを感じ、涙をおとして憐れがりしとぞ、大工も鎚をなげ捨て、涙ながらに、噫汝蝙蝠なれど、我ためには慈悲を諭すの善知識にも異ならず、吾今より生涯ゆめ〳〵この事をば忘るまじといへり、かくて主人も改め造るに忍びず、その中うち貫たる釘を拔き放ちやりて、去たみは改め造らざりけり、その蝙蝠はもとの如く棲みて、夕暮毎に出入をなしたりとかや、天然訓

〔嬉遊笑覽十二禽蟲〕蝙蝠の飛を見て、かうもり〳〵山椒くりよ、柳の下で水のましよと呼ことは、彼よくむせる物とするによれり、おもふに鳴聲のちう〳〵といへるが哽ぶさまに見ゆるをいふなり、可笑記に、ぶをとこのさたの限りかうもりのつにむせたるやうになきづらなる侍あり云々、按ずるに、唾にむせるとは、後に訛りたるなり、犬筑波集に、活字版おぼろ月夜にわたるかうもり、照もせずくもりもやらずすにむせて、古くはみな醋といへり、咽ばせむとて、山椒くりよ水飲しよといふなるべし、又醋を飲ましよともいへり、同意なり、守武千句に、山しようことにむせわたらはやかうぶりのすものがたりのつれ〳〵に、かうもりに醋山椒をいへること古し、百物話に、山椒にむせではあかゞねにかぶりつきてなをるなどみえたり、和漢三才圖會云、蝙蝠性好山椒、包椒於紙、拋之則伏翼隨落竟捕之、といへるは非なるべし、紙につゝむに山椒にはかぎらず、何にてもおなじ事なり、醋も山椒も彼が好惡によるにあらず、

〔春波樓筆記〕蝙蝠軒に掛りて、人の倒に歩くを怪むとは、惡人の善人を見て、己の如くならざるを、